

2021年7月4日 久宝教会 聖霊降臨節第7主日礼拝

メッセージ「親から受けたもの、子に与えるもの」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 7章 7-12節

先月の話ですが保育園で、一人の子どもが「神様なんて嫌いや」と先生に言って来たのだそうです。「何で？」とその先生が聞くと、その子は「だって、神様がコロナを作ったんやろ。コロナなんて早く無くなってほしいわ」と答えたのだそうです。それに対して、その先生は、良いとか間違っているとか、返したのではなく、「ホンマやね。なんてやろね。でも神様は病気を作っただけじゃないような気もするな。先生も考えて見るね」というように返事をしたのだそうです。その後、その先生は私の所に来て、その話を教えてくれ、「何て答えたらいいでしょうか」と尋ねて来られました。もちろん、私が「正解」を知っているわけではありません。しかし、質問して来た子どもに対して、その先生がすぐに正解を示さずに、「なんてだろうね。先生も考えて見るね」と言われたのは、その通りだなと思いました。

この世界には明確な答えがなく、正解・不正解が分からないことがたくさんあります。確かに、キリスト教では、神様が世界を創ったと考えていますが、「では、なぜ悪があるのか、病気や悲しいことがあるのか」という問いは、今に始まったことではなく、大昔から人々が抱いて来た問題でした。しかし、大切なのは、例えば病気に苦しんでいる人、悲しみにくれている人を神様は、決して放っておかれることはない、ということ。たとえ、神様のことを嫌いになっても、神様はその人を決して見捨てることはない、ということ。そして、このコロナ禍の中でも、知恵と力を尽くして、力を合わせて、医療看護にあたりたり、新薬を開発したりする人々の間にも、確かに神様が共にいて下さっている、ということなのではないでしょうか。

神様が全知全能で、全てを把握され、計画され、実行される方なのであれば、多くの人々の命が奪われた戦争も、神様の定めた計画なのか、という質問に対しては、20世紀を通して、戦争は人間が起こしたものだ、という理解が広がって来たように思います。同じように、地震や水害などの自然災害も、目に見えない神の怒りや崇り<sup>たた</sup>なのではなく、人間が土地を利用するために、大規模な造成工事をくり返し、環境を造り変え過ぎたために、起きた人災だと考えられるようになってきました。昨日も関東・東海地方で、梅雨の長雨によって、土石流が発生したというニュースがありました。行方不明になっておられる方々が、一刻も早く発見されて保護され、これ以上の被害が出ないことを祈るばかりです。毎年のように全国各地で、大きな災害が起こり、世界規模での「気候変動」が問題となっていますが、自然環境資

源を搾取する一方のこれまでの生活スタイル自体を変えていかねばならない所にまで来ているような気がしています。

新型ウイルスの発生と蔓延<sup>まんえん</sup>、地球規模での大流行も、そのような人間の生活スタイル自体から生じたことではないかと思っています。私たちはつい神様に向かって「何故、コロナ禍という災害を私たちに与えたのですか」と問いたくなりますが、むしろ現に生じている感染症という現実を、私たちがどのように受け止め、向き合っていくか、ということ、私たちが方こそ神様から問いかけられているのではないのでしょうか。「あなたはここからどうしますか。どう一歩を踏み出しますか。そこに私も一緒にいますよ」と……。

今回の聖書の言葉も、以前から引き続き「マタイによる福音書」の「山上の説教」からでした。7 節 8 節には「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。叩きなさい。そうすれば、開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、叩く者には開かれる」とありますが、これは同じ動作の繰り返しや継続を表わす「現在形」で書かれていますので、「試しに一回、言ってみましょう。やってみましょう」という意味ではなく、「与えられるまで、求め続けなさい」「探し物を見つけるまで、探し続けなさい」「扉が開かれるまで、叩き続けなさい」というように、途中で諦めないこと、粘り強くしつこく取り組み続けることを言っている言葉です。イエス様がこれらの言葉を語りかけた人々の多くは、様々な病気や障がいを持った人たちであり、宗教的にケガれている罪人と見なされた人たちであり、富と権力を持っていない、社会の中でのけ者にされていた人たちでした。「求めても与えられず、探しても見つけられず、戸を叩いても開けてもらえない」……、そんな日々の現実の中で、それでも自分たちに出来ることは、諦めないでしつこく挑み続けることだと励ましたのでしょ

続く 9 節以降の言葉も、とても分かりやすく、納得させられる言葉です。「あなたがたの誰が、パンを欲しがる自分の子どもに、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子どもには良い物を与えることを知っている。まして、天におられるあなたがたの父は、求める者に良い物をくださる。」だから、諦めずに祈り求め続けなさい、ということでしょうか。しかし、今一度考えて見ると、「あなたがたの誰が、パンを欲しがる自分の子どもに、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか」そんなことはあるわけじゃないか、と言われているにも拘わらず<sup>かか</sup>、これらの言葉を聞いた人たちは、実際には「求めても与えられず、探しても見つけられず、戸を叩

いても開けてもらえない」「パンを欲しがったのに石を与えられ、魚を欲しがったのに蛇を与えられた」という経験の方が、多かったのではないのでしょうか。

イエス様がこの地上を生きて歩まれた時代から、約 2000 年を経た今日でも、私たちは自分の子どもに「よいもの」、パンや魚を与えたいと思っているにも拘らず、実際には石や蛇を与えているということはないのでしょうか。私がこのようなことを考えるようになったのは、先日「記憶の錬金術」という話を聞いたからでした。例えば、もうすぐオリンピックが、民意を無視して強硬開催されようとしています。世界中から集まって来る様々なスポーツの選手がいます。それぞれの競技に何年間も必死に打ち込み、日々に過酷な練習を積み重ね、それこそ休まずに諦めずに、練習し続けて来られた末のオリンピック出場切符だったのだらうと想像します。しかし、純粹にそのスポーツが好き、楽しい、というだけで、そこまで来られた人はどれだけいるのでしょうか。高校野球の世界でもプロ野球の世界でも、つい最近まで体罰、暴力は、必要なことだといって、黙認、容認されていたように記憶しています。「それ位に厳しい鍛錬、修行を経なければ、決して心身ともに強い一流の選手にはなれない」……、そんな考え方が根強くあったのではないのでしょうか。

「今の自分があるのは、かつての親や監督からの厳しい躰、愛の鞭、鍛錬があったからだ。だからこそ、親や監督には感謝している」というような言葉を、時々、聞くことがあります。それは既に自分の受けた過去の傷や痛みを、直視しないで済むように、美しいものにすり替えて自分に思い込ませる「記憶の錬金術」に他ならないという話でした。「記憶の錬金術」を経ると、表向きはまるで美しい金のように見えるけれども、実際には過去の傷に蓋<sup>ふた</sup>をして、嘘のメッキで塗り固めているだけであり、そのことを自分自身でも忘れてしまっているために、無意識の中に自分もまた人に対して暴力を振るったり、ハラスメントをしたりしてしまうのだということでした。なぜ、現代社会はこんなにも生きづらく、息苦しいのか。便利になり豊かになったはずなのに、人々はちっとも生き生きせず、何だか憂鬱<sup>ゆううつ</sup>でしようがないのか。それは社会全体に暴力とハラスメントが蔓延しているからだ。諸悪の根源は幼少期の虐待経験にあると、経済学者の安富歩<sup>やすとみあゆみ</sup>さんは言われていました。

例えば、ナチス・ドイツを率いたヒトラーはとんでもない悪人で、彼だけが特別な人、特異的に狂った人であったかという、恐らくそうではなかった。彼自身は最後の最後まで自分はドイツ、アーリア人のために正しいことをしていると信じて、戦争を続け、ユダヤ人や他の民族、様々な障がい者たちを虐殺し続けていました。自分がおかしいこと、間違ったことをしているとは思ってもいなかった。なぜそのように

考えるようになったかという、彼自身が幼少期に親からものすごい虐待を受けていたのだそうです。

自分が人から嫌なことをされた時、相手が強くてやり返すことが出来ないので、その腹いせに自分より弱い相手をいじめる、ということは、子どもたちの世界でも、また動物たちの世界でも見られることです。しかし、自分の被虐待体験が大きい場合には、そこに「記憶の錬金術」が働いて、自分自身を守ろうとし、なおかつそのゆがみ、ひずみが、無意識のうちに、周囲の人々にハラスメントを及ぼすのだそうです。今の日本社会は、それが蔓延<sup>まんえん</sup>している状況なのではないかと思います。

イエス様は言われました。12 節です。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ『律法と預言者』である」……。「律法と預言者」とは、「聖書そのもの」のことですから、「聖書に書かれていることを、一言で言えば、『人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい』ということです」という言葉です。「『人にしてもらいたいこと』『人からされて嬉しいこと』を、自分も人にしなさいね。それが『自分のように、隣りの人を大切にする』ということですよ」というわけです。これはこれで、とても分かりやすいのですが、しかし、その肝心の「自分が人からしてもらいたいこと、人からされて嬉しいこと」それ自体が、「記憶の錬金術」によってゆがめられていたら、どうでしょうか。暴力の再生産、ハラスメントの再生産になってしまいます。

そのような負の連鎖を止めるためには、まず自分の気持ち、自分の過去の経験に、素直に向き合うことが不可欠です。自分が「人からしてもらいたいこと、人からされて嬉しいこと」は何か。逆にまた「人からされて嫌だったこと」は何か。「記憶の錬金術」を介することなく、それらに向き合えた時、私たちは、「親から受けたもの、そしてまた、子どもに与えるもの」「前の世代から受け継ぎ、次の世代へと引き継いでいくもの」に、誠実に向き合えるようになるのではないかと思います。

「与えられるまで、求め続けなさい」とイエス様は言われました。私たちはもう既に諦めていたり、また「与えられたつもり」になってはいないでしょうか。また石を渡してパンを渡したつもりになってはいないでしょうか。私たちの暮らす現代社会には、命そのものが大切にされない程に、多くの課題があります。そしてそれらの課題に向き合うには、私たちには知恵も力も、また時間も足りません。道半ばで諦めたくなることもあります。それでも命の神は私たちに、「今日も生きよ」と言われて、命を与えられます。共にいて下さる神様に支えられて、与えられるまで求め続ける歩みへと導かれて行きます。